

『原化記』について

内山知也

一、まえがき

中唐中期の小説集原化記は過去において研究者の眼にあまり触れなかった小説集であった。漸く近年、齊魯書社刊『太平広記選』（王汝濤・余潤沢・趙炯・錢勳米選注、一九八〇年濟南出版）上篇の一五八頁に、次のように紹介されたに過ぎない。

《原化記》 本書は兩唐書芸文志、宋史芸文志、四庫全書總目提要、直齋書錄解題にみな著録されていない。中国叢書綜録に皇甫氏撰と題している。作者の時代は知りえないが、ほぼ広異記と同時で、共に晚唐である。内容もまた志怪が多く、太平広記に選入されたものも少くない。一篇の長さは一般的にやゝ短い。しかし『胡蘆生』と『韋氏』のように怪異の話を記録してはいるものの事実で実証しようとしており、女怪録のように、すべて架空の虚構を読者に示しているのとやや異っている。其の他の小説集を沿襲した作品の多くない所が長所である。

この紹介は補足と訂正を必要とするものであって全面的には従えない記述である。

まず、原化記は、新唐書芸文志が編纂される北宋中期までに、すでに散佚してしまい、辛うじて北宋初期に太平広記に選入されたことにより、後世に伝わったことは明らかである。但しその著者を「皇甫氏」とするのは、重校說郛の撰者のやりくちの摸倣であらう。重校說郛本の蜀二三には「原化記一卷唐皇甫氏」と記されているか

らである。同じ説部でも明鈔本には原化記は選入されていないから、おそらく清朝に入って、書肆が太平広記から数篇を抜き出して、勝手に「皇甫氏」の名を書き入れたものであろう。正しくは撰者名不明であるし、巻数もおそらくは一卷というのではなく、現存の分量からいえば数巻には上ったであらう。

次に作者の時代を『広異記と同様に晩唐』としているのは決定的な誤りである。『広異記』には願況の序が現存しており、かつ内容からも中唐初期の成立であることは、既に拙稿の考証したところである。

物語の特色を玄怪録に比較して、『や、短編で実証的である』という指摘はほぼ当たっている。しかしこのような漫然とした比較に何の意味があるのだろうか。もし玄怪録を牛僧孺の元和期の作品であるとしても立証するならば非常に重大な意味をもってくるが、該書の玄怪録の解説の部分には全くその成立の年代にふれる所がないのである。

太平広記選の三二八頁、広異記の項の解説を見ると、

本書の成立時代がわからないために、誰が誰を沿襲したのやら詳しく考証するてだてがない。

と記している。これでは前掲の解説と合致しないことになり、編集者の粗瀾を嘆かざるを得ない。そしてこういう誤りは下編（一九八一年刊）に及んでも訂正されていないのである。

小論はこの原化記の全貌をとらえ、その作者、成立年代、その特色を考察すると共に、中唐元和期の小説集の性格を把握することを目的とする。

二、原化記の作品について

原化記の現存する作品は、太平広記に収録されているものがそのすべてである。哈仏燕京学社の太平広記篇目及引書引得と、それをそっくり模倣したらしい芸文印書館刊張次吉氏の太平広記人名書名索引には誤りがあるので、まずそれを指摘訂正しておきたい。

周次吉氏は、

○馮俊（卷二三・神仙二三） 出原仙記

○採葉民（卷二五・神仙二五） 出原仙記

○李衛公（卷二九・神仙二九） 出原仙記

の三編を原化記の中に入れては、それは全くの誤りである。元来原仙記という別の一本があったと考えるのが適當であつて、哈仏燕京学社の引得の誤りをそのまま周氏は踏襲してゐると考えられる。その理由は、太平広記の談本・黄本・人民文学社本ともに出典を「原仙記」としてゐるからである。ただ校勘記が採葉民と李衛公の二篇について明抄本には「原化記に出づ」と記されてゐるといふ注をつけてゐる点に問題が残らう。しかし、これら三篇を見ると、すべて、洞天や仙界を採訪することを主題とした物語であつて、書名の「原仙」（仙界をたずねる）という名にふさわしいばかりでなく、文体も原化記とは異つてゐる。従つてこの三篇は原化記の作品とは認められないのである。

また周次吉氏は

○拓跋大郎（卷三六・神仙三六）

○崔希真（卷三九・神仙三九）

○李山人（卷四〇・神仙四〇）

○薛尊師（卷四一・神仙四一）

の四編を原仙記の項に入れてゐるが、これらの作品は広記の各本とも出典を原化記と注記してゐるものであつて誤りである。この誤りは、周氏が哈仏燕京学社の引得の誤謬を検討することなしに踏襲した結果である。

その他、周次吉氏は、

○柏葉山人（卷三五・神仙三五）

を原化記の項に入れてゐる。この作品は「化源記」と出典注がつけられてゐるものである。化源記といふ注記は

太平広記全体の中でこの作品にしか付けられていない。しかもその内容からみると、柏葉仙人田鳳という人物の伝記で、兄弟の早逝をはかんだ田鳳が神仙術を志し、柏葉を食ってついに神仙となるという物語である。その物語構成は「薛尊師」のそれと同じであり、文体も他の原化記の作品と大差がないから、注記の誤りと判断して原化記の一編と見なしたい。

また、周次吉氏は

○張生（卷三一〇・神二〇）出纂異記

を明鈔本の注記に拠って原化記に入れているが、各本は「纂異記」を出典としている上に、ストーリーと文体は明らかに原化記の作品群とは異質であるから、原化記の項から除外すべきである。

さらに、周次吉氏は、

○蠶女（卷四七九・昆虫七）

も原化記に入れているが、出典注は「原化伝拾遺」となっており、物語の年代が高辛氏の時代であり、四川の馬頭娘廟にまつわる古伝説の記録である。原化記の作品は唐代の話柄を主としているのに対して、この作品だけが古いので異質な感じがする。従ってこの一篇も原化記の項から除外すべきである。

右のような作品を加減すると、太平広記に撰入された原化記、すなわち現在われわれが原化記のすべてと考えられる作品は次の五九篇である。作品番号、作品名・広記巻数・広記分類およびストーリーの概略を記すと次の如くである。

①裴氏子（卷三四・神仙三四）裴氏の子は一老人に親切にしたので鍊金の金を与えられる。後に太白山に行き洞天に入る。安史の乱の時その洞天に逃れて助かった。

②柏葉仙人（卷三五・神仙三五）田鳳は兄弟が早逝したので長生術を求めて華山に入り、道士のすすめで柏葉を食い、上清に謁し仙術を得る。嵩陽に隱棲して百二十三歳になり、屍解して青都に去ってゆく。

③拓跋大郎（卷三六・神仙三六）扶風県令は権貴の出身で威張っているが、主簿の李と県尉の裴は賓客を好ん

だ。冥中に拓跋太郎という人が入ってくる。それは裴の道術の師峨眉山人だった。県令は急病で死んだが、大郎の持つ桑の枝で打たれて生きかえる。

④崔希真(巻三九・神仙三九) 絵の巧い崔希真は嚴冬の日老人に親切にする。老人は道術があり、その後についてゆくと舟中に葛洪の第三子がいた。家に帰ると老人の描いた神仙の図があった。のちその絵を携えて茅山の李涵光天師を訪ねると、その絵は葛洪の第三子が描いたものだと言われた。

⑤李山人(巻四〇・神仙四〇) 術士李山人は御史中丞李汝のために吉凶を予言する。後に自分の死と再生も予言して去ってゆく。

⑥薛尊師(巻四一・神仙四一) 薛は兄弟が早死したので官をやめ、唐臣をつれて嵩山に入り、陳山人に逢う。山人の行方を追って山中に入ると、山人は虎に食われていた。しかし更に奥に入ってゆくと石室中に死んだはずの山人が居た。薛は道士となりのち昊天観に入った。

⑦賀知章(巻四二・神仙四二) 賀知章は西市の錢貫し売りの王老人に黄白術を教わろうとし、珠一個を与えたが、老人はそれで胡餅を買って食べたので、知章は怒る。老人はそういう知章を叱る。やがて知章は退官して故郷に帰り道術を求めた。

⑧蕭穎士(巻四二・神仙四二) 齊の鄒陽王の八代の孫蕭穎士は潜山に入ったところ、三百二十七年前鄒陽王に仕えた左某に会う。

⑨何諷(巻四二・神仙四二) 何諷が古紙の中から一本の髪を得て、切って焼き捨てた。道士に聞くとそれは脈望というもので、紙魚が神仙の文字を三度食べて化したもので、天の星使が降下するものである。水に入れて飲めば換骨上仙したのにと惜しがられる。

⑩王卿(巻四五・神仙四五) 酒店の王卿は道士について山に入り天師に会い、焼丹のかまどの番人となる。つかまのふたを取ると兎がとび出し、仙丹煉成は失敗に終る。

⑪鄭冊(巻四九・神仙四九) 温州刺史鄭冊は黄老の術を信じていたが病氣となり、天台の道士金柔や家族の見

守る中、屍解仙化する。

⑫張山人(卷七二・道術二)曹王(太宗の子)が衡州で狩をした時、郴州連山觀の道士侯生は道術を使って鹿を隠してしまふ。この連山觀を馬糞で汚した男が張山人の教えて救われる。

⑬陸生(卷七二・道術二)明経陸生は驢馬を追いかけて終南山に入ると、洞天に老人が居り、その仙童はみな町の屠沽であった。陸生は道術を習い、禁を破って王侍郎の家に侵入し娘を攫おうとするが、葉法善に見破られ、終南山につれて行かれる。

⑭潘老人(卷七五・道術五)少林寺の寺門の外に泊められた潘老人は、南岳から太原に行く人で、小さな瓢からいろいろな物を出して使い、また中にしまいこむ術のある人であった。

⑮胡蘆生(卷七七・方士二)胡蘆生という占師は劉闢の出世と滅亡、李蕃(蕙)が将来宰相になること、滎陽の鄒生が仕官することを占い子言する。

⑯吳堪(卷八二・異人三)吳堪は景源を大切にしたので天がたにしの女房を与える。悪県令が難題をふつかけるが女房の助けで救われ、最後に県の役所は火災で焼ける。

⑰華嚴和尚(卷九四・異僧八)華嚴が洛陽に居た時、ある沙弥が僧の鉢を借りて壊したので僧は怒って死ぬ。後嵩山に居た時蛇が講堂に上ってくる。華嚴は僧の弟子に「これはお前の師だ」と教える。弟子は蛇をつれて外に出ると蛇は石に頭を撃ちつけて死ぬ。後に僧は郎中裴寛の娘に生まれかわり、十八歳で死んだ。

⑱相衡問僧(卷九五・異僧九)自分の説経に自信を持っていた僧は聴衆がなくなり、失望して衡岳寺にゆき老僧に会う。僧の言に従い、大衣を売って食物を買い、野に撒いて鳥や虫に食わせた。二十年後河北に帰ると聴衆は八千万人となり、皆若者ばかりであった。

⑲崔尉子(卷一一一・報応二〇冤報)吉州県尉崔某は赴任の途中孫という者に殺され、その妻王氏はやむなく孫の妻となる。二人の間に子が生まれ、その子は科挙受験に上京の途中祖母の家に寄り、父の遺品の衣を貰い受けて帰る。王氏はその衣を見て子に事実を語り、孫を官に訴える。

②王叟（巻一六五・廉儉付吝吝）吝で子のない王夫婦は、自分の莊客が僅なもので商売して暮らしているのを見て悟り、自分の倉庫を開いて食べる。後安慶緒の乱の時、その倉庫の物は官軍の食糧となった。

③嘉興繩技（巻一九三・豪俠一）嘉興県で通緝の罪で捕えられた男が、繩技を披露し、満坐の注視の中見事脱獄してしまふ。

④車中女子（巻一九三・豪俠一）呉郡の若者が明経の試験に上京中、二人の少年につれられ、とある家に入ってゆくと、車に乗った女がやって来て軽快な業を競べあう。女は盜賊の頭目で、若者から馬を借り、宮中の金品を奪い、逃げる。若者は捕えられ深い穴に入れられるが、女たちに救出され、呉に帰る。

⑤崔慎思（巻一九四・豪俠二）進士の受験に上京し下宿した崔は、その家の女主人に結婚を申し出る。女主人は崔の妾となり二年つれ添ったが、一夜仇敵の首を携えて帰り、崔に別れを告げ、子を殺して立ち去る。

⑥義俠（巻一九五・豪俠三）ある賊曹が一人の盜賊を脱獄させてやる。官を辞してある町に来たところ、その県令がかつての盜賊であった。県令が危害を加えることをおそれ、県境を越え、ふと下男に県令のことをもらして嘆いたところ、ベッドの下に隠れひそんでいた県令の刺客は、逆に県令の首を取ってもどり、どこともなく去っていった。

⑦李老（巻二一六・ト筵一）商人出身の劉某は長安の占師李老の予言のとおり開封の県尉となって財を蓄え、浚義県に移つてもそうだったが、寿春の幸になつたら失敗した。彼の成功は大商人の亡父が生前それらの地で財を散じていたからであった。

⑧漁人（巻二二一・器玩三）蘇州の松江口の漁民が小さな鏡を網でひっかける。この鏡を見ると皆気分が悪くなり、湖にもどすと元気になる。この鏡は数百年に一度出現するものだと故老が言う。

⑨周郎（巻二二三・器玩四）周郎の奴僕水精は潜水の達人だったが、汴の井戸に名剣を携えて潜り、二度と現われなかった。その井戸には竜神が住んでいたからである。

⑩西市人（巻二八〇・夢五）西市の人が夢の中で冥府につれてゆかれ、扉の隙間から役所の中をのぞいていた

ら、朱泚が裁かれており、朱泚の部下が三十人くらい居て、十ヶ月後に事件が起ると予言する。目がさめた後、その通りの事が起った。

㊤張中殿(卷三〇七・神一七) 戸部郎中張滂の子仲殷は武術を好んでいたが、ある老人が巧みに鹿を射るのを見て驚き師事する。南山の洞の中に入り猿のようなその老人が弓の秘術を伝授してくれる。後に仲殷は東平軍に行き弓術を教えた。

㊦楚州人(卷三一二・神二二) ある人が妻や奴婢を村にのこしたまま旅に出て数年後村に帰った。村人が祝賀の宴を催すと舞人に神が馮く。舞人は大王になり、ある人の妻を自分の妻にするといひ、朝になると胡神がやってきて妻をつれてゆくと語り。翌朝妻は倒れて死んでいた。

㊧画琵琶(卷三一五・神二五淫祠) (前文が欠けているため意味不明。琵琶の霊験を語るものの上である)

㊨房集 (卷三二六・妖怪四) 権力者であるところの尚書郎房集の家に十四五歳の小児が現われ、一枚の布袋を携えている。親戚の子かと思ひ房集が何かと尋ねると、「眼球です」といふ。中から数升もの眼球がゴロゴロと出て来て四散する。驚くまに房集の目は見えなくなり、後に事件に連坐して誅殺されてしまふ。

㊩韋滂 (卷三六三・妖怪五) 士人韋滂は弓の名人で、ゲテモノ食いだつた。都を歩いて日が暮れ、とある土人の家の一宿を頼む。その家では隣家に死人が出たので引越す所だつた。韋は夜中鬼が出たのを射殺し、その肉を食べ、翌日その余りを宿の人に献じた。

㊪劉氏子妻(卷三八六・再生一二) 劉某は胆の太い人で、隣家の王氏の娘を嫁に欲しがっていたが果せぬまま従軍した。帰還して試胆会に出席し、墓地から屍体を担って帰ると、それは王氏の娘で、しかも娘は生き返つたのでめでたく結婚した。

㊫華亭堰典(卷三九三・雷一) 華亭の堰典の妻が私通し、隣家の物を盗んだ。隣家の人が怒って文句を言ふと逆に夫婦して食つてかかる。その夜雷が落ち、堰典夫婦は焼死し、脇腹に天罰という文字が書いてあつた。

㊬守船者(卷四〇二・宝三珠) 楫船の番人が雨上りの廟の前に長い物が火を呑んでいるのを見たので竹竿を投げ

つけると、その物は消え、地上に珠が落ちていた。番人はこれを揚州の胡店に売り巨利を得た。

③ 饅餅胡（巻四〇二・宝三珠）ある拳人が隣家の餅売りの胡人の病気の世話をした。拳人は餅売りから珠をもらい、それを市で売り出したら、都に上ったばかりの胡人が見て驚き、その珠を持つ人は海に入っても濡れないという珍宝であると教えた。

④ 魏生（巻四〇三・宝四雜宝上）豪族の魏生は安史の乱後落魄して嶺南に行き、虔州までもどってきた時、一個の石を拾う。長安の胡人の宝会に参加し、この石を出陳したら胡人が千万で買いとった。これは胡の大宝だったのである。

⑤ 京洛士人（巻四一六・草木一一木怪下）ある士人が山路でコブのある大樹を発見し、採取しようと思ったが斧がないので、紙鏡を作り神樹に見せかけて帰りに人夫をつれて立ちよったところ、すでに神が樹に付いていた。神は切らないお礼に、絹の埋めてある荒れ塚を教える。

⑥ 韋氏（巻四二一・竜四）韋氏は夫の閬州參軍孟某に随い赴任の途中駱谷の谷に墜落する。しかし現われた竜の背に飛びのり、揚子県に着く、その県尉をしている弟を訪ね、無事夫のもとに送り帰される。

⑦ 班石（巻四二四・竜七）都の士人が山路で珍しい石を拾い、子供の玩具にしていたところ亡くしてしまつた。或日、大雨が衝の所にばかり降るので不思議に思い見てみると、例の石が壊れ鶏卵の殻のようになっていた。それは竜の卵だったのである。

⑧ 張老（巻四二四・竜七）寺の鐘撞きの張老は術士で悪竜を禁圧している。竜は和尚に「珠をやるから張老に頼んで自由を与えてくれ」と言う。和尚が頼むので張老は寺を去る。すると竜は大雨を降らせ珠を奪ってしまつた。

⑨ 天宝選人（巻四二七・虎二）ある選人が都の近くの空き寺に入ると、あばら屋に一人の女が虎の皮を纏って寝ていた。男はその女を妻にし、任地をまわり、数人の子も生まれたので前の寺に立寄り、妻に「お前の居た所を見よう」と言うと、妻は激怒して虎に化し、林に入つて行つてしまつた。

④李奴（巻四三〇・虎五）拳人李は怠け者の奴僕を打った。奴僕は怒り「今年は閏年で虎が多いはず、どうして私を食わないのか」と叫んで門を出たが、すぐ虎に食われてしまった。虎は殺した人の魂を使い、衣類を草の上に畳んで置いてあった。

⑤中朝子（巻四三一・虎六）落ちぶれた士人が舅の家に寄宿していた。その娘を嫁に貰う約束して旅行し、二年後に帰ると約束しておいたのに四年目に帰った。士人は途中のある寺で虎に背負われた女を救出し、莊園に帰るが、それは今死んだばかりの婚約者だった。やがて女は生きかえり、二人は結婚する。

⑥南陽士人（巻四三二・虎七）南陽の士人が熱病にかかり、虎爪の使者の牒を受けて虎に化する。天神の命により大理評事王某を待ち受けて食うが、後に人にもどり長葛県令の席で「変化」の話をした時、つい自分の過去を語ったため、偶然にも王評事の子だったその県令に復讐されてしまう。

⑦張俊（巻四三三・虎八）宣州溧水県尉元澹は任期を終え懷州に帰る。途中、宋汴の山中で同行の莊客張俊の妻が虎に攫われる。張は虎の穴を発見して虎を殺し、妻の屍体と併せて持ち帰った。

⑧溈陽獵人（巻四三三・虎八）溈陽の獵人が虎を捕える弩弓をしつらえ、物かげに隠れて見ていると、佷鬼が現われて仕掛けを発射させてゆく。そこで別の弓を用意して虎を射殺すると、佷鬼は躍って去っていった。

⑨柳井（巻四三三・虎八）監察御史柳井が一人の書記をつれて嶺に入り孤館で寝ていると、猿のような小鬼が現われ書記の頭に小旗を立て、虎が食べる目じるしにする。柳が抜き去ると虎は去ってゆく。書記は劍を持って虎穴に入ると、虎の皮と人名簿があり、出しなに胡僧に逢う。胡僧の言うまま木に登り、虎の皮と血のついた着物を投げると、胡僧は一時虎と化したのが、又人間の姿となって去ってゆく。

⑩光祿屠者（巻四三四・畜獸一牛牀）光祿が妊娠した牛を殺しかねていた。屠殺係は命乞いをするその牛をかまわず殺してしまった為に、一時狂人のようになつた。

⑪戴文（巻四三四・畜獸一牛償債）貪欲な戴文は隣人と協力して暴利を得たので村人の怨みを買った。文が死ぬと隣人の牛が仔を生み、その脇腹に戴文という字が白毛で現われた。文の子はそれを消すようにと訴えた。

隣人は牛が盗まれることを懼れ、夜は家の中に閉ぢこめておいたら死んでしまった。

⑥韓駒 (巻四三五・畜獸二馬) 韓は愛馬があった。蜀の暴れ馬に乗ってきた人が調教しようと思つて調教師を頼んだら、馬は繩を切つて韓に噛みつこうとした。しかし愛馬がその暴れ馬に噛みついて事なきを得た。

⑥江東客馬 (巻四三五・畜獸二馬) 江東のある旅人は忠実な馬を持っており、泥酔した時も馬の背に乗つたまま樹によりかかつて睡りこけたのに無事であった。まもなくこの馬を宣州の館家に売り、ある職について宣州に使者としてやつて来たとき、かつての愛馬に乗つたが、ふり落されて噛みつかれ踏みつけられてさんざんな目にあつた。

⑥章華 (巻四三七・畜獸四犬上) 百姓章華は愛犬を飼っていたが、王と二人で山に柴刈りに行くと虎に逢つた。二人が地に倒れると犬は虎の鼻に噛みつき、氣絶した二人の口を吸つて蘇生させる。しかし犬は酔つたやうになり一晩で死んでしまつた。

⑥嵩山客 (巻四五八・蛇三) 嵩山で修業していた人が大蛇を発見し、殺して料理したところ雷が起こり、一座の者は皆死んだ。ただ殺すことに反対して早く帰つた人だけが助かつた。

⑥衛中丞婦 (巻四五九・蛇四) 御史中丞衛公の婦は暴虐だつた。熱病にかかり部屋にこもること十数日、ついに大蛇に変化し、衣服もベッドに散乱していたので、家人は野に送つて放つてやつた。

⑥相魏貧民 (巻四五九・蛇四) 相州魏州あたりの貧民が荒地で蛇を発見した。殺して穴を見ると十数匹の蛇がいたのでそれも殺して埋めた。翌日役所に殺人の訴えがあり、役人が現場へ行つてみるとたしかに人の屍体が埋められてあつた。貧民は捕えられたがなお無罪を主張したので再び役人が調べたら、そこには死んだ蛇が埋められてあつた。

⑥蜘蛛怨 (巻四七八・昆虫六蜘蛛) ある寺の僧が蜘蛛をからかつていたずらしたら昼寝の時に刺されて死んでしまった。

⑥京都儒士 (巻五〇〇・雜録八) 臆病な儒士が一夜友人と我慢くらべをする。怪物と思つて斬りつけたのは帽子

と自分の驢馬の鼻だったので、皆に笑われる。

三、原化記の背景

(a) 原化記の時代背景

原化記の物語の背景となる時代は、ほとんど唐代に限られる。さらに詳しく年号別に分類すると次のようになる。

- 貞観 ⑫張山人
- 開元 ①裴氏子 ⑥薛尊師 ⑬陸生 ⑰嘉興繩技 ⑳車中女子 ㉑李老
- 天宝 ③拓跋大郎 ⑦賀知章 ⑰華嚴和尚 ⑲崔尉子 ⑳王叟 ㉑天宝選人
- 至德乾元上元 ㉒房集 ㉓魏生
- 大歷 ④崔希真 ⑧蕭穎士 ㉔韋滂
- 建中 ⑨何諷 ㉕西市人
- 貞元 ②柏葉仙人 ⑩王卿 ㉖崔慎思 ㉗漁人 ㉘華亭堰典 ㉙韋氏 ㉚戴文
- 元和 ⑭潘老人 ⑮胡蘆生 ㉚守船者 ㉛李奴 ㉜章華 ㉝嵩山客
- 太和 ㉞光祿屠者

右のうち㉞光祿屠者の物語だけが他とかけ離れた後の時代になっているので、太は元の誤記と考えてよいと思われる。その他㉚張仲殷の物語に「東平軍」という名称が出てくるが、東平は山東省東平県で、唐代では鄆州と呼ばれた地である。中国地名辞典によれば、五代の時に「東平軍」が置かれたという。新五代史卷六〇職方考を調べてみたが東平軍の名は未検である。仮にもしそうだとすると、この記事は五代の事件ということになる。しかし、唐代では鄆州は平盧軍節度使の首都であったので作者は鄆州の古名東平を用いたとも考えられる。元和

郡県図志には鄆州の中の一県として東平県の名が記されている。平盧軍は中唐諸藩鎮の中でも最も軍事力強大で、唐朝に対抗していたところだから、弓術の巧みな武人を喜こんで歓迎したのである。

原化記には年号を明記せず、「このごろ」(頃・近者・頃歳・近世)と冒頭に書き出す作品がある。⑳義俠・㉑楚州人・㉒南陽士人・㉓江東客馬・㉔蜘蛛怨・㉕京都儒士がそれである。これらの作品群の特色は、年代どころか主人公も登場人物も、殆ど氏名の記されていない点である。㉖南陽士人に王評事という官人の姓だけが記される程度であり、これも仮托であろう。これらの作品は撰者が伝聞したものの中でも特に出所不明のものであって、撰者自身その身元を確かめ得なかつた物語であろう。この作品群に共通な点は一種の寓話性である。

右以外の二十篇は物語の年代背景が不明であり、推定も困難である。

撰者がこの何れの時代に生きたかについては、ただ一つの確証がある。㉗韋氏の物語の末尾に、「韋氏表弟裴綱、貞元中、猶為洪州高安尉、自說其事」と記されていて、「韋氏」の物語が、貞元年間に高安尉裴綱という者から直接撰者に語り伝えられたものであることがこれによって証明されている。

そして物語の最も年代の新しいものは㉘季奴の元和九年(八一四)であるから、貞元(七八五—八〇四)から元和九年ころにかけて原化記を書きため、元和末年には完成していたと思われる。

(b) 原化記の地理背景と登場人物たち

一編の物語がどのような地域を背景にして展開しているかということ、それを取材した撰者の生活した場所、あるいは旅寓した場所と関係するし、交流者の身分職業とも密接な繋りを持つ点において興味深いものがある。

原化記の作者が最も多く物語背景とした土地は長安で、次は蘇州近郊である。まず長安およびその周辺が主なる背景になっている作品は、①裴氏子・②柏葉仙人・③李山人・④薛尊師・⑤賀知章・⑥陸生・⑦胡蘆生・⑧崔慎思・⑨義俠・⑩季老・⑪西市人・⑫韋滂・⑬齧餅胡・⑭魏生・⑮京洛士人・⑯班石・⑰天宝選人・⑱京都儒士

の十八編であつて最も多い。これらの作品は都会的風俗の中で、道士や官人、受験生や豪俠、占師や胡人・商人たちが物語の中心人物となる。おそらく撰者もこうした都会の中で生活した経験があると思われる。⑮胡蘆生の物語は三つの小話に分かれ、長安と洛陽が背景となつてゐる。

蘇州とその近辺の地域を背景とする物語は、⑯吳堪・⑰嘉興繩技・⑱車中女子・⑳漁人・㉑華亭塚典・㉒守船者・㉓戴文の七編である。⑳吳堪の物語は「たにし女房」の古い説話を沿襲したものでいかにも水田地帯にふさわしい。登場人物も農民・脱税奇術家・盜賊団・漁師・船の通行税をとる堰役人・塩輸送船の番人・土豪といった庶民階級かそれに近い人たちがかりである。

道教の福地洞天の所在地と関係する物語には、太白山(①裴氏子)・華山(②柏葉仙人)・茅山(③崔希真)・潜山(④蕭穎士)・衡山(⑤相衡問僧)・嵩山・終南山(⑥薛尊師・⑦潘老人)・終南山(⑧陸生)・嵩山(⑨潘老人)・嵩山客(⑩)などの作品がある。これらの作品の登場人物は神仙や道士あるいは神仙術への志願者である。特に志願者たちの傾向は、神仙伝に登場する神仙のように堅固な信念を抱いた修業者とか博識な神仙術研究者ではなくて、統文怪録「杜子春」の物語の杜子春のように、全くの偶然の機会に、あまり修業を積むこともなく、いわば安易に神仙に接近し、うまく神仙の道に入れたり、あるいは些細な心のゆるみから神仙になることに失敗するといふ、いわばぐうたらな人物が多いことである。

その他、江南西道地方を背景とするものに、江州(⑪潯陽獵人)・鍾陵(⑫崔希真)・饒州樂平(⑬章華)・洪州高安(⑭韋氏)・永豊(⑮韓晞)の一群があり、平盧軍・義成軍・宣武軍・武寧軍・淮南の南北を従貫する大運河に沿つた地域及びその近隣を背景とするものに、相州衛州魏州(⑯相衡問僧)・⑰王叟・⑱相魏貧民)・汴(⑲蕭穎士)・⑳周郎)・鄭州(㉑崔尉子)・亳(㉒中朝子)・楚泗(㉓楚州人)・淮陰(㉔劉氏子妻)がある。また宣歙地区に、宣州(㉕李奴)・㉖張俊、山南東道地区に、南陽(㉗南陽士人)・荆湘(㉘張老)・鄆州(㉙王卿)、河東地区に、太原(㉚王卿)・五台? (㉛画琵琶)・浙東地区に、温州(㉜鄭冊)がある。

右のような地域のすべてに撰者が赴き、そこで物語を採集記録したとは思われないが、⑭韋氏の物語のよう

に、洪州高安県尉裴綱から韋氏の話を聞いたと記してあれば、高安県に赴いたことがあるか、少くとも県尉程度の階級と交際し得る身分であったと想像される。また④鄭冊の物語のように、特別に温州刺史鄭冊を尊敬して「鄭公」と称しているところを見ると、撰者は鄭冊の部下の一員であったか賓客であったのであろう。

一篇の物語の中において、主人公が各地を移動する場合がある。特に道士が信仰を求めて名山や有名な道観に神仙を探訪する話は、旅そのものが一種の修業の序段階であるようだし、その遠い旅は仙界を探訪するかのようでもある。撰者が神仙にあこがれ、道術を尊敬し、道による「化」を信ずる人であったことは疑いない。また官僚士人は試験や調選のために上京と下郷をくり返していた。彼等は大運河を利用したり、駅亭を利用して旅し、知人を求めて投宿し、一夜の宴に加わった。そこでは当然のように情報が交換され、奇聞異譚が得意げに披露された。撰者がこまめで身分でもあれば、年代・場所・登場人物の名などはいちいち問い質して正確に記すはずであるが、末輩であれば、聞き憶えて部屋に帰ってから記録しなければならぬ。撰者が名のある学者で文章が立てば、華麗な物語をすぐその場で作りあげ、一座の者の回覧に供しただろう。しかし原化記の作者はそれほど文章家でもなく、又身分ある官僚でもなかったらしいことは、登場人物の名のどここの誰ともわからぬ物語が多く、又身分の低い人の多いことがそれを証明している。

例えば、人が虎に変身して他の人物に危害を加えるという筋の物語は、淮南子傲真訓の公牛哀が虎に変身した話以来、述異記³には漢の宣城郡守の封邵が虎に化して郡民を食べたので、郡民たちは「封使君よ、もう来ないで下さい」といい、当時の人に「封使君になるまいよ、民を治めず死んでも民を食う」といわれたという話に変貌し、やがて一たん虎に化した人物が再び人にもどる話になり、東陽无疑の齊諧記の師道宣の物語に及んで、虎と化して人を食った人物が再び人にもどったとき、自分の過去を語り、偶然居合わせた食われた人の親戚に復讐されるという筋へと演変する。そういう説話の演変の歴史の上に、原化記の「南陽士人」の物語を置いてみると、齊諧記のストーリーと質的には何の変化もないことがわかる。ただ違っている点は、師道宣は二十二歳の若者の時発狂して虎となり桑摘みの娘を食い、後に殿中令史という官人になるのに対して、南陽士人の場合は特に官

人になつたとは記されない点と、「天神」の命令によって食う人を選択するプロットが新たに挿入されていることである。つまり原化記の撰者は「官人が暴虎のように人民を侵す恐怖」というテーマを、「天神による命令」にすり替えてしまい、そうすることによって、人が虎に「化」する理由を明白にしようとしているのである。原化記の撰者が登場人物の階級的背景を軽視し、「化」の实在とその原因を追究する方向に興味を持っていることがこの一篇によつてもうかがえる。

李復言の統玄怪録の「張逢」も「南陽士人」と同一テーマで貞元末年を時代背景としている。おそらく同じ説話に拠つておのおの別に創作される際に生じた個人的差異にすぎないのだから。

一方「人虎伝」と後世命名されて中島敦の「山月記」の粉本にもなっている張誥の宣室志の「李徴」の物語は、虎に化する李徴という人物が進士出身の江南のもと県尉であり、対応する人物袁修は同年の進士で監察御史として設定される。虎は同年の友人を食うにしのびないどころか、自分の詩文稿を托し、自分の子の将来まで依附し、虎に変じた我が身を嘆きつつ別れる。ここではやはり階級的身分の問題が基底に置かれ、物語の文章及び構成がその方向——同年の進士出身の文人たちの親密な交流——に引きずられ、虎を人にもどす必要性を喪失してしまふのである。同一テーマの小説における登場人物の階級的背景もまた重要な小説作者の意図をはらんでいと言えよう。その反面、説話の重要なモチーフ——虎の恐怖・佞鬼（虎に食われ、虎のために使役される幽鬼）の恐怖——を削除してしまつた「李徴」の作者は、「張生」や「南陽士人」とは別の文学的効果をねらつていたのである。

四、原化記の構成と撰者

原化記が元来どのように編集されていたものか、巻数は何巻あつたものか、現在では知ることができない。ただ^⑤胡蘆生の物語のように、主人公胡蘆生が三人の人物の将来を占い、その結果が占いどおりに現われるという

場合、その三つの物語は、並列されていたであらう程度のことしか想像できない。

それでは各一篇の形式はどのようなものであつたかと言へば、絶対多数の作品は、物語を単純に叙述したただけのもので、他に物語の末尾に撰者の意見や感想の類を付記したような作品も少しはあつたことである。後者のような小説集における作品の叙述形式は、初唐期の小説集以来よく見られる現象である。例えば、初唐の唐臨の冥報記には、物語の後にその話の語り手の名を記す例が多数あるし、盛唐の張鷟の朝野僉載の場合には、物語の後に撰者の感想や人物批評を記すことがしばしばであり、問答形式による方法すら試みていた。

同様に原化記の一篇⁹⁹華亭堰典の物語には長い問答体の考証議論文が付随して、特に興味深いので次に全文を紹介しよう。華亭県とは蘇州府内の一小県である。

○〔物語部分〕貞元年間（七八五—八〇四）華亭県界村の堰典（船舶の通行税をとる小役人）の妻は、よその男と密通しており、またある時、隣家から手巾を一枚盗んだ。隣家の者がこれに気付いて堰典の家に文句を言いに来た。ところが堰典は妻と共に隣人をさんざんに罵つたので、隣人も腹を立て、「お宅の奥さんは他人と密通している上、人の物を盗んでいるんだ。それなのにダルになってこつちを罵るとは神様がお許しになるはずがない」とやり返した。堰典は「私の妻は決して密通も泥棒もしておらん。もしそつちの言うとおりなら、わが家に雷でも落ちればいい」と言った。双方悪口を言いあって別れたが、夜になると風雨になり、雷が天に轟き、堰典の家を直撃した。堰典と妻その他下男下女五六人が同時に死んだ。翌朝になつても雨はまだ止まなかつたが、隣人はこの家が倒壊し燃え続けているのを見て、皆で炎の中から堰典とその妻を捜し出したところ黒焦げに焼けていた。隣人は、「どうかこれ以上延焼させないで下さい」と天に祈つたところ、火事は漸くのこと自然と消えていった。堰典の膈腹の上には「愚か者が不貞の妻を庇いだてて家族一同を犠牲にした」と書いてあり、妻の膈腹には「不義を働いた上に泥棒までした」と書いてあつた。県の役所に報告して検視してもらい、この話は遠近に知れ渡つた。呉越地方では雷の直撃で死ぬ者は少くないと聞いている。牛や解（うみへび）魚・樹木などで雷撃を受けたものがあると、皆な県に報告して検視を受けることになつてゐる。

○「議論論文」ある人が言う「人に過失があつた場合には天が罰を下して殺してもよいでしょうが、牛だとか樹木や魚などの場合、どうして罪があるからといって殺せましよう。また主君や父を殺害したり、道理に合わない殺生をする人があるのに、天はなぜそういう者を処罰しないのでしょうか。ぜひわけを教えてください。」洞庭子は答える「昔、夏の皇帝武乙⁽¹⁰⁾は天を弓で射るといふ無法を働いて雷に撃たれて死にました。晋の臣王導⁽¹¹⁾は柏の樹の下に寝て身に降りかかった災をよそに移しましたが、これらの事は歴史書にも記されています。牛や魚は田圃を踏みつけ傷つけるし、水は稲の苗を傷つけます。だから罰せられるのです。」或る人は「水が与える損害など僅かなものではありませんか。それなのにその罰は、どうして大きいのでしょうか」と尋ねた。洞庭子は答えて、「五穀は万人の生命です。国の大切な宝物なので、天は牛や魚をも罰して、人間どもを誅めるのです。樹木の類は竜がその中に隠れるものです。神が竜を取りおさえると、ついでに樹木も損傷を受けます。天道は人から遠く懸け隔っているのです。このような形で人民に教を垂れるのであって、さまざまな事情があつて十把一からげにはできないものです。私はかつて『漳泉故事』を見たことがあります、それによると、漳州と泉州は州境が隣接し、県の南の竜溪は境界線がはつきりせず、昔から争い事が起つて決定しませんでした。ある年に突然一大雷雨が起り、山の岩壁に落ちて壁が裂けました。その壁には次のような文章が刻んであったのです。『漳・泉の両州、地を分つて太平。万里惑はず、千秋程と作す。南のかた竜溪に安んじ、山高く氣清かれ。』その文章は今でもまだ見わけられるということです。天が教えを垂れて人民に疑惑を持たせぬようにしたのである。かつ論語には『迅雷風烈必らず変あり』とあり、また礼記には『もし疾風迅雷甚雨あれば、則ち必ず変ず。夜と雖も必ず興きて衣服し、冠して坐す』とあり、また『しきりに雷震ふ。君子以て恐懼して修省す』とあります。そもそも聖人は天の教えを奉じて（このような言葉を遺されたのですから）でたらめなはずはありません。今このようなことを申し上げたのは、叙述しただけです。（このような天の理法があるのに）そのようなものはないと言ひ張る人など、いかなる罰を受けても悲しむに値しないではありませんか。そもそもそのように主君を殺し父を殺し、罪もない人を殺す者には、人の世の法律に刑罰があります。どうして小さ

かしい人間の心で天の広大な計らいを責めることができましようか」と述べた。

このような構成の物語はすでに張鷟の朝野僉載に一篇だけではあるが見られる。太平広記卷一六九の「張鷟自号浮休子」と題する（出典朝野僉載）物語の構成は、

婁師徳は榮陽の人で納言である。客が浮休子に尋ねる、「婁納言はどんな人ですか。」（浮休子は）答える、「納言はまじめでおだやか、寛容できびしく……」（下略）

という問答体で、十名の則天武后朝における権臣の批評をしている。広記の標題注はまた珍らしいものであるが、張鷟の自号が浮休子であることを指摘する好資料である。この方式を原化記のこの物語にひきあてて考えれば、「洞庭子」という人物こそこの物語の、ひいては原化記の撰者の号であることになる。朝野僉載にはしばしば「浮休子曰」の構図が記録されているが、原化記の場合はただこの一則しかない。なぜ原化記の他の作品にこういう形式が見られないのか。太平広記に収録されるさいに削られてしまったのか、それとも本来なかったものか。この疑問を解くことは困難である。

しかし、原化記の撰者は数篇の作品の末尾に彼の物語に関する感想や批評や考証を短く記している。例えば、
 ⑤崔慎思の物語の最後において、「古の俠も能くこれに過ぐるなし」と女主人公の復讐の行為を評している。このようなほめ言葉は、全くストーリーは別であるが白行簡の李娃伝にも、作者白行簡が李娃の行為を讚美する有名な文句、「ああ、信濃の姫にして節行かくの如きは、古先の烈女と雖も踰ゆる能はざるなり」といつているのに極めて類似している。

⑥鄭冊の物語は、温州刺史鄭冊が屍解することを語っているわけであるが、鄭の死にざまに対して、それが真実まぢがいな「屍解」なのであって、平凡な死ではないことを強調するために、次のように述べている。

真誥に云ふ「其れ陰徳あると道を好み仙を信する者とは、此の例（死んでも形体柔軟・顔色が生前と変らな

い）の品格けだし多し」と。鄭公潛化の跡、虚無の位を親れば、其れ昭昭乎たり。

と見る人たちがいたにちがいない。しかし撰者はことさら鄭の日常が熱心な神仙術の信者であることを知っていたから、道書「真誥」(南朝梁の陶弘景撰)の權威によって屍解説を強調してみせたのである。太平御覽卷六六四道部六の屍解の項に真誥を引いて、「人死んでは必ず其の形を見るや生人のごとく、足を視るや青からず、皮の黧くろならず、目光の毀くけざるは皆な屍解なり。」とあり、また屍解した人は天上の官に任命されるのだというふうにも記されている。こういう道教の信仰を原化記の撰者洞庭子も信じていたのである。

④季奴の物語において、主人に打たれて腹たてた奴僕が、同輩に向かって「今年は閏年で、こういう年は虎が多いと聞いているが、どうして私を食わないのかなあ」と主人を怨嗟したところ、門を出るやいなや虎に食われてしまふ。しかも自分の身につけたものをきちんと脱いで食われていた、という話であるが、その末尾に、「蓋し虎は能く殺されし者の魂神を役使すと。(これはその)為す所なり」と記している。虎に使役される人間の亡霊を「佞鬼」と言う。彼等は虎に食われた哀れにも不幸な人の亡霊である。彼等は虎の命するままに自ら裸になつて自分の身体を虎の餌食にしたり、虎の手先きになる。段成式の酉陽雜俎の鄭思遠(15)の物語には、「虎は人を殺すや、能く尸しかばねをして起ちて自ら衣を解かしめ、方めて之を食ふ」と説明しているほどに季奴の物語の奴僕的行為はそうした佞鬼の哀れな行動であることを原化記の撰者はまだ究明していない。また原化記以前にも、戴孚の広異記の劉老(16)の話には、鷲鳥飼いが虎に鳥が盗られるので罾をしかけて虎を捕えようとしたが、佞鬼が現われその仕掛けを外してゆくために一頭も取れない。村人が困っているとき老人が現われ、佞鬼に梅や楊梅を食わせると被害が少いだらうと教えてくれたので、その手配をしたら、虎が罾の中に陥っていた、という話が収められている。これら佞鬼を中心とした物語を比較してみると、佞鬼の奇妙な行為を記述しようとする広異記の撰者に対して、奴僕(17)の怨嗟がかえって自ら災を招くことになる不思議を描く方向に原化記の撰者は志しており、晚唐の段成式は佞鬼の性格をきちんと説明している。すなわち、伝承の合理的説明の方向へと撰者は志すと同時に、伝承の不思議の上に自らを載せて新しいテーマを搜り出そうとしているように思われる。そういう合理的説明への志向と文学的發展への欲求は中唐小説作者たちの進むべき二つの方向であったのである。奇譚を極力解明しよう

と古典の知識を引用したり、倫理道德の規範を拡大して擲い上げたりする反面、より浪漫的に文学的裝飾を施して楽しもうとするようになった。撰者が進士志望者あるいはその合格者であれば一層その傾向を強め、彼等の友人グループや先輩さらに権力者との交際の状況に応じて小説の創作は方向を変え得たと思われる。中唐期が客観的にそういう小説の時期に入ってきたことは、以上の僅かな例によっても証明できよう。

五、む す び

以上のような検討の結果、原化記はほぼ六十篇ほどの比較的短い物語を集めた小説集であり、撰者はその題名が示すように「化」を探究する意図をもって、一種の儒道兩教の混淆した觀念から、「化」の存在を信じ、物語を書いていると言えよう。また撰者の氏名は判明しないが、洞庭子という号を持ち、長安や蘇州・温州・洪州の地に住んだ可能性が強く、階級もせいぜい県尉程度以上には出ない下級の知識人であつたらうと思われる。

原化記の書かれた時代は貞元から元和の中期に及び、進士出身の文学者たちが、浪漫的小説を書き始めた時代であつた。そういうさなかにあつて、原化記もまた、人物のとり上げかた、事件の考証のしかたにそれら進士階級の文人たちと同じ方法を取りつつあるが、しかし、彼等ほどには文学的ではなかつた。それは彼の環境が然らしめたものと考えざるを得ない。

(昭和五十七年八月二十一日)

注

- (1) 内山知也 中唐初期の小説——「広異記」を中心として——(加賀博士退官記念中国文史哲学論集)
- (2) 敵一 萍校録太平広記校勘記(民国五十九年十月芸文印書館刊)
- (3) 太平広記卷四二六「封部」参照
- (4) 太平広記卷四二六「師道宜」参照

- (5) 「南陽土人」の物語では天神が仮鬼と化したらしい土人に命令を与えて王評事を食わせる。この天神の性格は仏教の毘陀羅または迷怛羅の思想に基づいているのであるうか。台湾瑞成書局刊仏学辞典一〇五五頁「毘陀羅」の項によれば、「十誦律二曰、有比丘、以二十九日、求全身死人、召鬼咒尸令起、水洗著衣著刀手中、若心念若口説、我為某故作毘陀羅、即誦咒術、是名毘陀羅成。若所欲殺人、或入禪定、或入減尿定、或入慈心三昧、若有大力咒師護念教解、若有大力天神守護、則不能害。是作咒比丘、先弁一羊、若得芭蕉一樹、若不得殺前人者、当殺是羊若殺是樹、如是作者善、若不爾者、還殺比丘。是名毘陀羅。」優婆塞五戒相經所説同。これは死人の靈魂を呼びもとじ、死人を使って殺人を行う咒術である。
- (6) 太平広記卷四二九「張逢」参照
- (7) 太平広記卷四二七「李微」参照
- (8) 内山知也「隋唐小説研究」八九頁「冥報記と唐臨の周辺」参照
- (9) 内山知也「隋唐小説研究」二五五頁参照
- (10) 「夏」は「殷」の誤記。史記股本紀に「帝武乙無道、為偶人、謂之天神。与之博、令人為行天神、不勝乃譏辱之。為革囊盛血、仰而射之、命曰射天。武乙獵於渭涇之間、暴雷震死。子太丁立。」とある。
- (11) 太平御覽卷九五四木部三柏の項に引く幽明録に、「王丞相見郭景純、請為一卦。卦成、郭意甚惡。云、有震厄、公能命駕西出教里、得一柏樹、截如公長、置常寢處、災可消也。王從之。數日果震、柏木粉碎。」とある。
- (12) 論語郷党第十参照
- (13) 札記玉藻第十三参照
- (14) 原文には書名が欠けているが、易震卦の象伝のことばである。
- (15) 太平広記卷四三〇「鄭思遠」参照
- (16) 太平広記卷四三一「劉老」参照